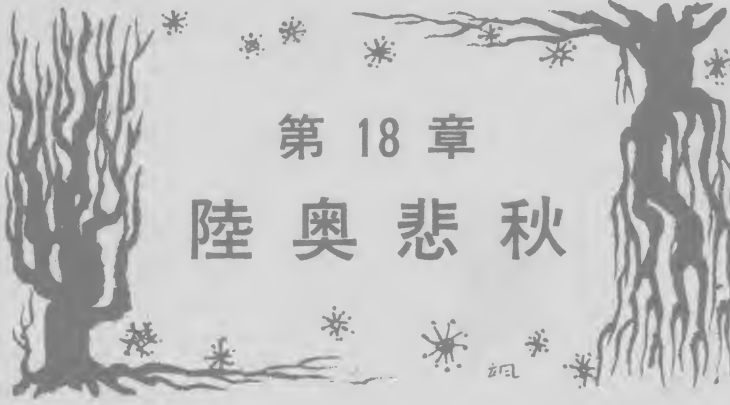
日本忍法伝

第22回

作・佐々木守
え・岡本颯子

第18章 陸奥悲秋

（一）

「あ、雪だ！」

少年がとつぜん叫んだ。

そのとおり、ずっしりと重い空からチラチラと舞いおりて来た白いものは、人々のひたいや肩にとまって、フワリと溶けた。

この年、はじめての雪なのであった。

鉛色の空は、果てしなくつづき、これからの道中のきびしさと苦しさを一そう人々の胸に思いおこさせる。

雪――と知ったときから、にわかに寒さが増し、ふみしめる大地からの冷気がジーンと足の裏にしみるように感じられる。

がしかし、雪は、チラと寸時舞いかけたのみで、すぐやんだ。

まだ冬ではないのだ。秋の終り――それは冬が間近かに迫ったささやかな前ぶれであったようだ。

「あ、雪だ！」

という少年の声につづく声はなかった。ただ声ならざる声――うめきににたためいきがそこここからもれただけである。

二千名近い大群衆の中で、「あ、雪だ！」という少年の声に答える余裕のあるものも、また逆に叱りとばす元気のあるものもいなかった。おとなたちは過ぎ来し年月とこれからの長い旅を思いやり、子どもたちはつかれ切っていた。

出雲族千八百――、みやこをすて、信濃をすぎ、越の国（富山県）を通って、とおくみちのくへおちのびようとしている。

「かわろうか」

弓月はかたわらの玉櫛をみていった。

「いえ、もう少し」

玉櫛は腕の中の赤児を、あらためて抱きしめる。吉野山から、伊賀をこえてさまようこと何十日――ようやくこの出雲族の一団に出会ってその群れに身を投じたものの、それは弓月と玉櫛にはまだ見たことも、考えたこともない土地への旅であった。

いや、弓月と玉櫛だけではない。千八百の出雲族すべての人々にとっても、それは見知らぬ土地への旅立ちなのである。

ただ、みやこを去るはるかな北の

くに——そこに、まだ大和朝廷の勢力及ばぬくにがあるときいての旅であった。

みちのく——そのことばはまた、「みちのおく」を意味する。文字どおりそこは日本の果て、蝦夷（えぞ）といわれる民族が住むという。が、そのみちのくの先、海を越えた彼方には広い島が、いや島というにはあまりに広い「くに」がある。きたぐにの怒濤を越えたその先の島に、かつて、白雲わき上る日本海を見下ろしてそびえた「心の御柱」とあの荘大な出雲大社を、もう一度つくりたい、そしてあの銅鐸の妙なるしらべを心ゆくまでなりひびかせたい——その思いが、その幻想が、千八百の人々の足を、かろうじて前へ、前へとふみしめさせている力であった。

すでに大化の改新の威力は、畿内から四国、九州にまであまねくいきわたったいま、残るはまだ見ぬみちのくと、その先に横たわる蝦夷の地のみとなった。いく千の出雲族の中にはとうの昔に大和民族と名のった騎馬民族のもとに恭順し、そしていつかおたがいの血がまじりあって、自ら出雲族であることを忘れはて、あるいは知りもしない人たちが出ている。

そうすれば少くともこのような苦労はせずにすむものを——なにゆえかたくなに出雲の夢をみつづけなければならないのだろうか——。

おれは——と弓月は思う。おれは単純だ、おれはあの銅鐸の音に魅せられたからだ。だが、たとえば玉櫛は——。出雲族の娘としての玉櫛の考え方は——そう思うと、あの伊賀の山中で、まだ充分に傷いえぬ弓月に向かってほのおのようなことばでかたった玉櫛の顔が浮かんでくる。

憎い！　万感の思いをこめて玉櫛はそういった。天にそびえる出雲大社を朝に夕に仰ぎつつ農耕にいそしんでいた平和を、なにゆえ他の国から渡って来た異民族のためふみにじられなければならないのか——、それは親から子へ、子から孫へかたりつがれ、うけつがれて来た出雲族のいまや怨念とさえなった思いであった。

越の国から北へ——暗い海、あわだつ波。しかし、この波はあの出雲へつづく日本海。そしてそこには……玉櫛と出雲族の思いはそこでふたたびあの出雲大社へと回帰する。

北へ！　そこでもう一度あの神長祭政による出雲大社を復活するのだ。出雲族の王国を建設するのだ。

北へ！　出雲族千八百。老いも若きも黙々と歩む。

夜——男たちは山へ入り、四つ足獣のいくひきかをとらえ、女たちはささやかな火をおこす。秋の終り、獲物のかずは日ましに減ってくる。果して、これで、いや冬まで、みちのくまで、まぼろしの出雲王国までもちこたえることができるのだろうか。

わずかなほど火が弓月と玉櫛の顔を照らす。人々は語らない。語る言葉はもはやない。ただ玉櫛の胸の赤児だけが片言で何かつぶやいているのみだ。赤児はいい。山で、産みおとしたばかりの子を死なせた女が、いまこの子に乳をのませてくれたところなのだ。

千八百の中で、腹一杯なのは、お前だけかもしれぬな。弓月は心の奥でつぶやいて、生焼けの兎の足の肉をくいちぎった。

（二）

闇にうっすらと島の影が、見える。が、それも波の間に間にうかんでは消える。佐渡という。能登軍団の隊長・白布は絶壁の上に立ってじっと佐渡の影をみつめる。昔——何百年か前、白布の祖先たちが、遠く朝鮮から馬と共に長い旅をつづけて東へ向かい、九州の地を発見したのも、あるいはこんな夜だったのかもしれない。波間に浮き沈みする陸地を発見したとき、騎馬民族の祖先たちはどんな思いがしたことだろうか。

とつぜん、暗い海と佐渡の影が、さあーっと闇に沈んだ。弓月の後で天をも焦がすような火が燃え上がったからだ。

弓月はしずかにふりかえる。能登軍団の配下が、いま、元の軍団の小屋にかたっぱしから火をつけているのである。

能登軍団が能登軍団の小屋に火をかける。そうだ、白布は二度とここへかえる気はないのだ。中大兄皇子の命をうけ、みやこからここまで一直線にかけつづけた白布は、まず自分たちの古い館をやく。

もはや我々には不要だ。かつて大和朝廷の秘密軍団としてあったときこそ能登軍団の名の意味はあった。が、大化改新のため人々の前に、そのものすごい破壊力でもって姿をあらわした以上、能登軍団は秘密軍団ではなくなった。

白布ののぞみはひとつ。首尾よくみちのくへにげた出雲族をうちはたし、出来れば、みちのくから蝦夷にすむ「蝦夷民族」を恭順させたあかつき、能登軍団を大和朝廷の正規軍たらしめること、これである。

一つ、また一つ、能登軍団の館は紅蓮の炎につつまれていく。

「ようし、女たちをつれてこい！」

白布は炎のてりかえしでまっかになった顔で叫ぶ。

やがて、海岸の岩場から、泣くことさえ忘れはてたような女たちの一団が、軍団員につきとばされながらやってくる。出雲族の女たちだ。男中心の騎馬民族が、ここで子孫をふやすため、まさしく子を産む道具としてのみかどわかしてきた女たちであった。

「火の中へたたきこめ」

先頭の女が、まず、軍団員の手によって、もえさかる炎の中へほうりこまれる。

そのとき、はじめて死んだようにただ茫然とたっていた女たちの口から悲鳴が上がった。

「かまわん、たたきこめ！」

にげる女、追う男、その影が、炎の中でもつれあった。そして、次々と火の中へなげこまれる女の影、あるものは断崖から身を投じていく……いっときがすぎたとき、白布のまわりには、燃えおちた小屋のくすぶるけむりと、黙々と整列する男たちの姿だけがあった。

「よし、出発だ」

白布はそれだけをいってパッと馬にのった。

「北へ！」

ピシリ、ムチが鳴って、あとは白布は一散にかける。北へ！　出雲族の最後の一人の息の根をとめるため

に、そして、新しい蝦夷民族と騎馬民族の勢力下におくために——、白布は馬を馳る！　そのあとを、馬蹄のみひびかせて能登軍団の騎馬隊が、風の如くつきしたがって走った。

北へ！

（三）

六五九年（斉明天皇五年）、「道奥国司」「道奥蝦夷」ということばがあらわれるところから「道奥国」あるいは「陸奥国」という地名がおそらく大化改新のときに設置されたのではないかと推定される。大化改新のさい、東国八道に国司が任命されているが、それは相模、武蔵、上総、下総、常陸、上野、下野、陸奥ではないかという考えもあるし、『古事記伝』には、崇神朝、景行朝に見える「東方十二道」とは、伊勢、尾張、参河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武蔵、総、常陸、陸奥であるとしている。みちのくとは、東国の道の奥の意であって、現在の栃木県・福島県・宮城県あたりをさしたものではないかとおもわれる。そして新潟県北部から山形県、秋田県にかけては、前者の国々よりも、ずっと開発がおくれていたもののようだ。

道の奥に対するに、秋田、山形あたりは出羽とよばれるが、出羽とは「いでは」、つまり「出端」で、いわばこれはまったくの辺地といった意味だ。

そして、そこに住む蝦夷については、『日本書記』によればこうなる。

——東夷は、性質凶暴で、侵犯を事とする。山には邪神がおり、野には悪鬼がいて人を苦しめる。蝦夷がもっとも強大である。男女は雑居し、父子の区別もない。冬は穴に宿り、夏は巣に住む。毛皮を着、血をのむという……。

果たして、北へ進む出雲族の誰がそのことを知っていたのだろうか。いや、彼らは何もしらないのであろうか。北進する出雲族の道が蝦夷の国へつづくものであるとすれば、そこで彼らは如何にして出雲の王国建設の度を果たし得ると考えているのだろうか。いや、もし前方にひかえる蝦夷を怖れたとしても、彼らにはもはやひきかえす道はないのだ。ひきかえせば大和朝廷の殺りくが待つ

のみであることを誰よりも彼らはよく知っているのだ。

信濃川は濁流を満々とたたえていた。長老の手が上がると、男たちは黙々と山へ入り、木を伐っていかだをあんだ。

千八百の出雲族が、数十のいかだに分乗して、さかまく濁流におし入る。

弓月も玉櫛と赤児をいたわるようにして出雲族三十人あまりのいかだの一つにのりこんだ。それ！　男たちは一せいにこぎはじめる。だが、その力にもまして濁流の流れくだる力は強い。

いかだは、さあーっと流れにおしながされ、しかし、それでも少しずつ、対岸へと近づいていく。どどおーっ、その音は濁流の中で木と木をむすびあわせていたつたの切れたいかだが分断される音であった。

一つ、又一つ、いかだはこわれて人々はあっという間に濁流の中にほうり出される。一瞬、その顔が手が、波間にみえて、やがてつい今までいかだにくんであった丸太のみが流れくだっていく。

「助けてくれ」の声もない。又、助けようとするものもない。死んでいくものも、それを見守るものも、いま他人に対して何一つ手出しの出来ない自分を知っているのだ。

それでも、多くのいかだは濁流をのり切って対岸へ流れついた。そしてまた、長い行進がはじまろうとする。

その前、長老の手が上がって、いかだにくんだ丸太の一つ一つがバラバラにときほぐされた。そして、その中の一番長い丸太が、しずかに信濃川の岸辺に立てられた。

高くはなかった。わずかに人間二人分ほどのその丸太は、それでも信濃川の濁流を見下して立つには充分だった。人々はその丸太の前にひざまずいた。

長老と、二三人の男たちが、その丸太の根元に白い布でつつんだものをおくと、長老がそっとその布をとった。中から、キラリとそれ自身光るものがあらわれた。

「銅鐸だ！」

弓月はなにか心がひきしまるものをおぼえた。

八雲たつ
出雲　白雲
海にたつ
七重　地の雲
八重　天の雲

しずかな合唱がはじめられた。そしてゴオオン、オン、あの心の底にしみとおるような音色がひびきわたった。

かつて、雲にそびえた心の御柱は、いま水にぬれたいかだの丸太であった。かつてゆたかな農耕の民としてさかえた出雲族は、いまは流亡の民であった。かつて、全国いたるところでみられた銅鐸は、いま、そのほとんどは土の中であった。しかし、ただ一つ、守りつづけられて来たこの銅鐸のひびきだけは、何百年の年月にもかかわることなく、出雲族の心の大いさを示して信濃川の濁流の上をひびいていった。

そのとき、弓月は、いま越して来たばかりの信濃川の向こう岸へ、どどっとかけつけて来た騎馬隊をみた。

先頭に指揮する、白い布を背負った男——。

「能登軍団が来たぞ！　いそげ！」

弓月は叫んだ。

かけて来た能登軍団は、そのまま、一気に馬を信濃川へのり入れたようであった。

出雲族はにわかに歩をはやめた。銅鐸はすばやく布でつつまれ、長老と共に列の先頭をはしった。

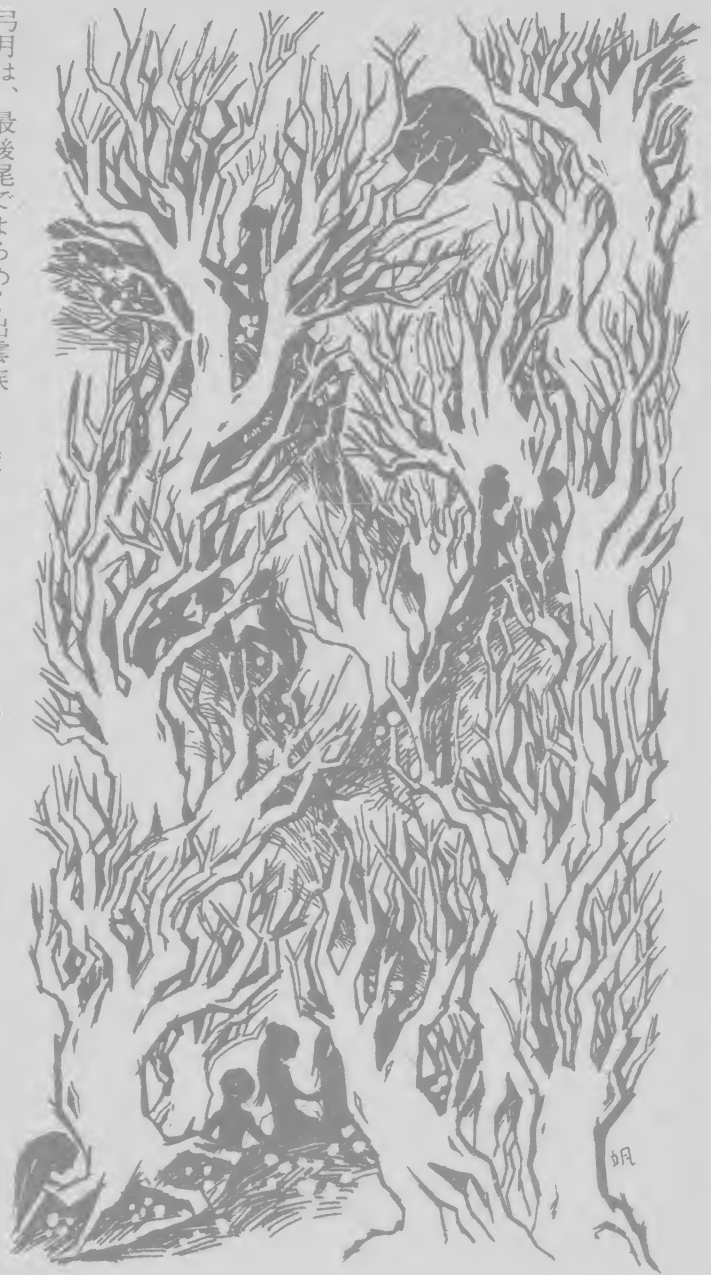
「玉櫛、おれは一番あとからいく」

弓月は列の一番後にまわった。少しでもやつらをくいとめる。阿賀野川を渡れば、蝦夷の国だ。そこまでいきつけば、何とか……。

弓月は列の最後尾から、信濃川へおどりこんだ能登軍団をみつづけた。

出雲族を苦しめた信濃川の濁流は、能登軍団に対しても同じ勢いで対していた。

濁流にのりこんだ能登軍団の先頭のものたちは、川を三分の一ほど進んだところで、あっというまに馬もろともおし流された。その数二十か三十！

しめた、弓月はほっと眉をひらいた。いかだをつくるにしても、奴らは馬も渡さなければならないのだ。時間がかかるぞ。よしこのヒマに！

弓月は、最後尾でよろめく出雲族の女たちを、にわかにせき立てはじめた。

（四）

阿賀野川――そこにも信濃川と同じような濁流がさかまいていた。

「上流へまわれ！」

弓月は先頭へかけつけて叫んだ。

「しかし……」

長老はいった。「どこまでいったら渡れるというのか」

「わからん。だが、ここにいてはすぐ能登軍団においつかれてしまうぞ」

「よし」

長老は決心した。出雲族は、阿賀野川にそって山へ向かいはじめた。いったい、このまま川にそってどこまで歩けばいいのか、それはわからなかった。そしてまた、いつ能登軍団においつかれるか、それも時間の問題であった。だが、少しでも山へ入っていれば――山道では騎馬隊の動きもにぶるだろう。

鬱蒼と茂る大原始林の中へ、出雲族千八百はあてもなくもぐりこみはじめた。

弓月はまた列の最後尾へまわった。そしてやがて山のふもとにおしよせる馬蹄のひびきをきいた。

そのときだ。にわかに列の先頭が乱れた。悲鳴がわきおこった。

「弓月！」

呼んだのは玉櫛の声だ。と共に、だっと逆おとしのように出雲族の一団が坂をかけおりてくる。

「どうしたァ！」

弓月は先頭へ向かって叫んだ。

「鬼だ！」

「なにっ！」

さっと人々をかきわけるようにして坂の上へとんだ弓月は、そこに見た！

原始林の木の間木の間に立ち並ぶ人々の姿を――、それは黒いひげで顔のほとんどをおおいつくし、ギラギラと輝くような目をもった男たちだった。

男たちの手には、一斉に矢をつがえた弓がもたれ、そして、そのうしろから、原始林をゆるがすような低い太鼓の音が聞こえはじめた。

蝦夷であった。

蝦夷の男たちは一歩前へ進んだ。そして弓月は、坂道をかけ上る騎馬隊のひびきを、太鼓の音と同時にきいていた。

（つづく）